

やち 谷地遺跡

(村上市大字天神岡字谷地ほか)

谷地遺跡は三面川支流の山田川左岸に広がる低湿地部にある遺跡です。遺跡の周辺には水田が広がり、南側500mほどのところに中世の居館大館跡、さらに南に縄文後期の長割遺跡、縄文中期の東興屋遺跡などがあります。

日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、今年6月から発掘調査を開始し12月初旬に終了しました。面積は中世が3,107㎡、縄文時代が2,170㎡です。遺跡は地表面下30～50cmで検出した中世(15～16世紀)の遺構と、約1.6mほどで検出した縄文時代前期(約6,000年前)の遺構からなる複合遺跡です。中世遺構の検出面は標高約12.5m、縄文時代前期の遺構検出面は標高約11mを測ります。

縄文時代の遺構は三面川やその支流の小河川により形成された氾濫堆積土壤中に掘り込まれています。遺跡の南側は土壌化が進んだやや粘質の茶褐色土が遺物包含層となっていますが、北側は河川の影響により土壌内の有機質が溶脱したシルト質の土壌です。南側は遺物包含層の厚さが20cmほどなのに比べ北側では50cmほどあり、これを土質の違いから大きく2つに分層しました。発見された遺構数は現在のところ、屋外炉64基、土坑118基、ピット1,219基、性格不明遺構24基、遺物集中5か所です。遺構の分布は遺跡の中央から南側に1,150基ほどの小ピット群が集中し、北側には河川流路沿いに土坑や屋外炉が集中しています(写真1)。炉の周囲や土坑内部から土器、磨石、磨製石斧、筥状石器、石鏃、管玉が出土しています。出土した土器は縄文時代前期の羽状縄文系土器(花積下層式から布目式や新谷遺跡相当)で、羽状縄文のほか捺系圧痕文、爪形文、網目状捺系文、斜縄文、ループ状文などの文様がみられます。これらの出土遺物から谷地遺跡は、県内でも調査事例の少ない縄文時代前期の遺跡であることが判明しました。土器は遺跡南側に位置する5か所の遺物集中から出土したものの以外はほとんどが北側の土坑(SK)内から出土しています。土坑内の土器はほぼ完形のもののが口を下にした状態で出土したり(写真2)、割れた状態で土坑の中央に重なるよう出土(写真3)したりしています。また、石器だけしか出土しない土坑(写真4)もあります。このような違いがどのような意味を持つのか、今後報告書を作成する中で分析を進める予定です。(株)シン技術コンサル 大島秀俊)



写真1 北西隅部遺構群



写真2 SK400遺物出土状況



写真3 SK1414遺物出土状況



写真4 SK877遺物出土状況